

宮城町文化財調査報告書第1集

# 宮城町想海塚発掘報告

昭和48年6月

宮 城 町

## 序 文

文化財の保存と産業開発については、常に新聞等で論議的になり、行政者としても頭の痛いところであるが、その内でも埋蔵文化財としての遺蹟の保存は所有者の善意に依存し、保存、方策を考えなければならない。

私の町の「想海塚」も所有者の善意で今日まで保存、保護されてきたが、いつまでも他人の所有権を抑制することもできず県教委に指導を仰いだ。そして、東北大の伊東先生、当時二女高の氏家先生、県教委の志間先生から心よく御承諾を得て、発掘調査にとりかかったが始めてのこととて、人夫集め、調査、手順についても全部、上記先生方のお世話になりここに発掘調査を終了し記録にとどめ資料として発刊の運びにいたったことは誠に喜びに堪えません。

この「想海塚」も本来なら、現況をそのまま保存し後世に伝承する意図であったが所有者の小松氏から宅地造成の申請があり、どうしても現況を維持することができず（先に当該地を買上げ史蹟公園という構想もあったが）発掘調査の段階にいたったが、その陰には、町財政の貧困等もあり、文化財を現状維持できなかったことに、いささか残念な気もいたします。

この様な埋蔵文化財は町内にも何ヶ所か未だ放置されているがこれらも買上げ等により、保存、保護をしなければならないと思うが町財政の現状ではどうにもならず。当時の措置について、今責任者となって始めて前任者である、庄子町長、首藤教育長の適切な判断と実行力に敬畏を表するとともに所有者の小松氏にも感謝申上げます。

今後とも文化財の保存については幾多の困難がともなうと思いますが関係諸氏の賢明な御指導と御配慮を得て、後世に悔いのないようにいたし度いと思います。

昭和48年4月

宮城町長 白石今朝松

## 目 次

### 序 文

1 調査要項 .....	1
2 調査概要 .....	2
a 遺跡発掘までの経過 .....	2
b 想海塚に関する記録及び口碑伝説 .....	3
3 想海塚の発掘調査 .....	4
a 想海塚の外形 .....	4
b 想海塚の内部 .....	4
c 想海塚の遺物について .....	5
まとめ .....	5

# 宮城町想海塚発掘調査報告

## 1. 調査場所

宮城県宮城郡宮城町下愛子字勘太1番地 地主 小松憲子

## 2. 調査日時

昭和42年10月2日より9日まで

## 3. 調査主体者

宮城町・宮城町教育委員会

## 4. 調査担当者

東北大学文学部教授 伊東信雄

宮城県第二女子高校教諭 氏家和典

宮城県教育庁社会教育課上事 志間泰治

## 5. 調査補助員

東北学院大学考古学研究部(佐野 進、平山良晴、高野 修、千葉恒治、久光清康、大友 賢一、佐藤秀穂、小松敏夫、伊藤静子、大川静子、千葉幸子、大葉千恵子、吉川恵子、阿部 洋子)



想海塚位置図 国土地理院図帳「仙台」 承認番号 昭48第16252号

×印 遺跡所在地

## 6. 協力者

宮城町立広瀬中学校職員・生徒

## 7. 調査概要

### a 遺跡発掘までの経過

遺跡は仙台市の西8km、奥羽山脈に端を発する広瀬川によって形成された割に大きな谷底平地の中央部平坦地にみられる。

ここは、丁度、仙山線落合駅と愛子駅のほぼ間に位置する地点であって、同線と僅かの距離を保ちながら併行して走る国道48号線（仙台・山形間）沿いの上地でもある。

この付近一帯は、畠地と雜木林が交錯してみられる景観をなしているが、最近、交通機関の発達によって仙台の近郊的様相をおびてきて、付近にもつぎつぎと中小企業工場、住宅などが立ち並びはじめた。

そこで、地主の小松巖子氏は、想海塚のある土地を削平して住宅地にしようと思いついた、まず、この塚上に生えていた杉の大木を伐採し雜木などを刈り払った。そうしたところ、形のきれいにととのった塚の全容が判然とした。それを見聞した宮城町教育委員会中野博社会教育主事は、42年1月、宮城県教育庁社会教育課に遺跡の性格の確認と、とるべき処置についての指示を仰いできた。そこで同課では早速調査を氏家調査員に依頼した。1月15日氏家調査員は吹雪をついて現地に出向き、この地方としては類例のない、珍らしい、封土をもつ塚であることを確認した。そのため町内の貴重な文化財として保存措置を講ずるよう示唆を与えて帰った。42年4月、埋蔵文化財調査係として就任した志間のもとに再び米跡の要請があったため、6月8日、現地を訪れて調査したところ、方形の塚で、四方に参道をもつ特殊遺跡であることを確認した。そこで、地主と懇談し、保存に協力するよう要請した。発掘調査を実施するにしても、保存をはかるにしても、まず最初に正確な地形図を作る必要があると認めたため、6月27日、

志間は中野社教主事らの協力を得て封土の地形測量を実施した。

この間、中野社教主事は、地主に対して願意をうながすとともに、町に対しては公有地化を働きかけたが、町の財政上実現はむずかしいことがわかった。そこでやむを得ず町および町教育委員会が主体となって発掘調査を行ない記録保存の措置をとることとし、調査担当者を伊東、氏家、



志間の三名に依頼してきた。そこで9月30日に伊東、志間両調査員は現地を視察し、発掘調査についての方針や具体的打合せを行なって、10月2日から発掘を実施することとした。以下発掘日誌によって経過をみるととする。

10月2日 庄子宮城町長、関教育委員長、首藤教育長ら関係者多数参列の上、発掘調査修祓式が行なわれ、のち、中央部を南北に横断する幅2mのトレンチを設定し、直ちに発掘作業に着手する。数10年を経た杉の大木の根や竹籠の根などの抜根で作業は難航する。表土をはぐと、直径10~20cmほどの下石が不規則に出上した。古墳の葺石とも認めがたい。

10月3日 3トンの物をつる力をもつチェーンブロックを駆動して大杉の抜根作業実施、根ががっちり張っているためチェーンブロックを破損し、これの修理などで作業は一時中断する。トレンチ南にある塗を自然の疊層まで掘り下げる。中央頂部の約30cmほどの地下から中國鏡が10枚、つぎつぎに発見された。

10月4日 南北トレンチ北側においても、約60cm下から沢山の玉石群が出土したが、意識して敷き並べたようなものでもないので築造の際にはうりこまれたものと考えられた。勿論、この付近一帯の土地では、このような玉石は地下に数多く掘り出すことができる。新らたに東西にトレンチを設定する。

10月5日 南北トレンチを掘り下げるにしたがって、玉石の出土量も増え中央部で一抱大の石塊2個が出土したが、前日の観察と同じで、これまた、造構を意味する存在でもないようである。午後には黄褐色の砂礫を含んだ地山層に達する。町史編纂のため米町中の菊地勝之助氏の米蔵をうける。

10月6日 各トレンチとも地山層に達するまで掘り進めたが、遂に内部遺構らしい箇所を発見することはできなかった。周辺調査のため西北部に長さ6.5m、幅1mのトレンチを設定したが、現地表から20cmほど掘り下げるに周辺底面の礫の堆積する地山層に達する。この調査で、封土の肩部にあたる箇所にやや縦長の下石を横にはりつけたように置かれた石列を発見した。

10月7日 封土肩部の配石列の露出作業に精を出す。作業途中で降雨があったため作業継続不可能となり中止する。

10月8日 南北トレンチ、東西トレンチ断面の実測を行う。作業員は封土西側の下石列の検出にあたる。南および北では、玉石列は散発的に認められたにすぎず、東側でも同様である。広瀬中学校の職員、生徒の来援を得て作業は一段と進捗する。

10月9日 西の封土肩部にめぐらされた配石列の平面図、側面図の実測を行ない、のち発掘地域などの平板測量を実施した。午後4時20分調査終了し、調査団を解散する。

#### b 想海塚に関する記録及び口碑、伝説

この塚は、安永3年(1774年)に書かれた仙台藩の国勢調査ともいべき「下愛子村風

土記御川書出」の古塚の項に、肝人蔵内が

### 1. 古塚 老ツ

上塙 2間  
1. 想海塚 四方四面 中塙 4間  
下塙 9間

右ハ想海と申候行人之塚之由申伝候、四隅ニ松也木宛四木有之候処、右之内巻本枯木ニ而折申候事

と、以上のように書上げているが、おそらく記録にあらわれた最初であると思われる。3塙に築かれたものであるといい、その計測結果まで記録されておるが、かなり正しく観察されているといえる。当時の四隅に生えていた松の古木は見当らないが、多分、現在までの間に枯死したか、あるいは古くに伐採されたものと思われる。

記録は、これ以外には見当らないが、想海塚に関する口碑、伝説は案外と多いようである。その一、二を簡略に紹介すると、かつて村が飢饉におそれ、餓死者を出した折に埋葬した塚とか、それらの供養塚ともいい、或いは、六部を殺したので、それを供養するために塚を築いたともいうものもあり、また、出羽国湯殿山からご神体を勧進してお祭をした場所とも伝えている。そのほか、飢饉、疫病などにおそれられた折、行者某が衆民を救うために塚を築き、自ら千枚21個(概の実という話をする人もいる)をもって木棺に納まり、生き埋めとなり、始めは鉢、鉢を鳴らして修法を行うこととしたが、段々と体力衰え21日目にはそれも聞えなくなってしまったと語りがれ、この時築かれたのが、この塚であるとも伝えられている。

#### 想海塚の発掘調査

##### a 想海塚の外形

方形の平面をもつ塚で、3段に段築が施され、形もきれいにととのった塚である。この下段底辺は、1辺の長さ17mで高さは約1mで、封土の傾斜部は40度ほどの角度をもって築かれている。中段は1辺の長さ11mで、高さは約50cmほどあり、封土の傾斜は緩く、僅かに段築の輪郭がうかがえるにすぎない。そして、その上に1辺の長さ7m、高さ約50cmの上段が築かれている。封土の全高は2.15cmと計測される。また、各辺の中央部には幅2mほどの参道とも見られるような状態の造り出しが突出している。なお、下段の4隅は角切りにしたものようである。また、この下段周辺を取りまいて、幅3.50mほどの浅い周溝のあったことを認めることができた。

##### b 想海塚の内部

内部上体をさぐるために、塚の中央部を横断する南北29m、幅2mのトレンチを設定し、地山に達するまで掘り進めることにした。丁度封土頂の直下、約30cmのところから中国の古銭10枚がバラバラと散って土中から発見されたが、埋納されたものとは思われるが出土状態から推して

特別に器物などに格納したものでもなさそうであった。のち、さらに慎重に下層部へと掘り進めたが、これ以外には何らみるべき遺構、遺物の発見はなかった。

もちろん、下層部には、長径30cm、短径15cmほどの河原石がゴロゴロと出土する箇所もあったが、これらの河原石の出土する面は上下不同で面をもっておらず意識して敷き並べたという状態ではなく、この土地の周辺の土を盛り上げる際に、地山層の河原石も一緒に投げ入れて築成したものと思われた。こうした出土状態は東西トレントおよびその北東の拡張部においても同様であったので、そう判断してほぼ間違いではあるまい。

また、トレント断面からみて、周辺の土を盛り上げて築かれたものであることは、想海塚周辺の堆積層の層序と反転層序をなしていることからも容易に推察できるもので、何層にも積み上げられたものであることが認められた。

周辺部の調査を実施するために、比較的保存状態のよい北西隅を選びて長さ7m、幅1mのトレントを設定し発掘した。その結果、塚の周辺部には深さ60cmほどの浅く掘り進められ場所が認められたが堀と呼ぶほどのものでもなかった。この調査を実施中、丁度、下壇の肩部にあたる部分に長径30cm、短径15cmほどの河原石を横長に1列に並べ置かれた石列を発見した。そこで、これを追及した結果、西辺ほど扇形に近い形をとどめている箇所は他になかったが、4辺全部に造られたものであることが判明した。そして西北角の石の布置状態からみて、角切り状に並べ置いたものと思われた。

#### c 想海塚の遺物について

出土遺物としては、塚の頂部直下約30cmの場所から出土した中国銅錢10枚がみられるにすぎない。これらは多少鏽化して文字の判読の出来かねるものもあるが、紹興元宝、元豐通宝（いづれも北宋銭である）は各2枚づつ出土しており、祥符通宝（北宋銭）1枚、皇宋通宝（南宋銭）は3枚で、他の2枚は判読できなかった。これらはすべて中国の北宋、南宋時代の古銭で、この塚を築造した時代を推定できる重要なしかも唯一の出土品といえる。

#### ま と め

以上、想海塚発掘の概略について記したが、まず、外形について仔細に検討を加えると方形に築壇された各辺の中央部には、參道様の造り出しのみられる築造遺構は類例がなく古墳とみるには、若干疑問を感じるものであった。

発掘の結果、外見から想定したとおり、古墳の埋葬主体である棺槨その他の内部施設を認めることができなかっただし、もし、かりに木棺などを埋葬したとすれば、その部分の積土層の層序が乱れている箇所とか、変化のある箇所が発見できるはずであるが、そうしたものも何一つ発見できなかった。したがって古墳としての根拠も不充分といえる。

さらに、こうした考え方を裏付けるものに、塚頂直下から宋銭が一か所からつぎつぎに発見さ

れたということである。これらは、まぎれ込んだものとは考えられないし、まして常識的にみても古墳から出土することのありえない銀貨なのである。ではこれら古銭は何を意味するものなのかな?ということになるが、もし山碑、伝説に出てくる想海上人または行者などの埋葬時に副葬された六道銭的性格のものと考えるならば、数が多いことになるし、副葬品とするには、地表よりあまりにも浅い部分からの出土であって墓壇に副葬されたものとは考えにくいのである。むしろ古銭10枚という数からいっても何か宗教的な信仰、行事などにつかわれたのち、そのまま直かに埋納されたものではあるまいかと想像されるのである。

それにもう一つは、塚の下段肩部に一列に敷き並べられた河原石の石列であるが、この封土の上肩部の土崩れを防ぐ目的と聖域を画するための布置であろうと思われる。したがって蓋石とは全然性格の違うものであるということができる。こうみてくると想海塚は古墳、または古墳墓という考えは全く成立しなくなるのである。

古墳でないとするとなんであろうかということになるが、まず考えられることは、堂宇を建てた基壇、十三塚、經塚などであろうが、もし仮に基壇とすれば、下壇の肩部に一列に敷き並べられた石敷列であるが、これからみて宝形造の堂宇の基壇とも考えられるが、このほかには礎石、または根石などの遺構の存在も認められないし、第一に中壇、上壇などの築壇があつて建物の立つ可能性は全くないのである。

また、これを十三塚の一つという説を称える人もあるが、この地方の古老によると、この付近は最近まで自然の佛をとどめておったが、この他には塚の存在は認められなかつたといつておるので、もともと一基しかなかつたものと思われる。したがつて十三塚ではなきそうに考えられる。

つぎに考えられることは、經塚ということであるが、中国宋銭の埋納や、聖域を画するとみられる石列があったこと、四方に参道とみられる造り出しのあることなど考えあわせ、經塚あるいは、それに類するような宗教的築壇とみるのが有力のようである。但し、この塚の規模が比較的大きく、遺物などの出土も乏しいため疑問が残り、今ここで、遺跡の性格をはっきりと断定できないのが残念である。いづれこのような同種の遺跡の発見、発掘調査研究などがすすみ、多くの類例が報告された段階で、この想海塚ももう一度検討する必要があると思われる。そうしたなら、今まで不明だった部分もより一層ははっきりと解明されるものと信ずる。

なお、この種の遺跡は、県内では、長造郡岩出山町字向山川北分校傍に、同型同大の規模のものが一基存在することがわかっているにすぎないことを参考までに付記しておく。

想海塚の築造はいつかということになるが、中国古銭の出土から推して、しかもこれらは宋銭に限られているということから、鋳造されて間もなく日本へ輸入され、やがて埋納されたということを考慮すると、塚の築造年代も限られてくるわけで、おそらくは鎌倉時代中期から室

町時代に及ぶ頃に築墳されたものと結論される。

では、こうした塚がなぜこの地に作られたかということになるが、この地は古くから山形県に通する交通上の要路に当っており、さらに街道沿線には、今でも山形県山寺、宮城町大倉の定義如来など信仰あつい寺院が多くみられることなど考えあわせると、当時のこの地方は人口も多く、信仰の対象としての宗教的基盤もできておったため、山紫水明のこの地を選定して宗教的築墳が行なわれたものではあるまいかと思われる。  
（志間泰治）

#### 参考

この報文をまとめたのちに、黒川郡大和町鶴巣の北目大崎地内の日光川遺跡で、この種の方形壇が1基確認され、昭和47年9月、東北自動車道工事に先立って発掘調査が実施された。

ここは、標高約40mの独立した丘陵の尾根上にあって、1辺の長さ14m、三段築成の想前塚と同様の方形壇で、やはり四方に参道状の昇降路とみられる振り出し部がみられた。

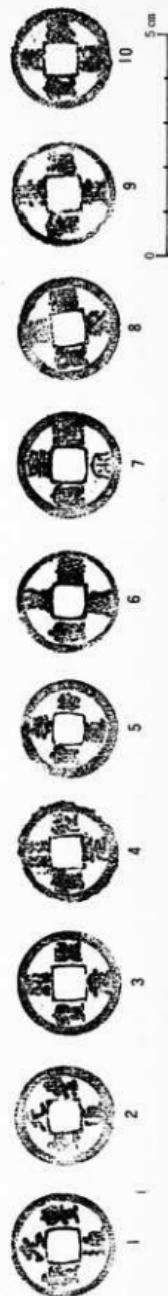
この土壇の中心部からは、長軸約3.5m、短軸3.2m、深さ約30cmの方形土塗がみつかった。その中央部は、盗掘されていたが、盗掘をまぬかれた3隅からは、元豐通宝（北宋錢）が1枚づつ出土した。

こうしたことから、この方形壇は鎌倉から室町期に築成されたものであることが、ここでも確認されたが、いかなる宗教上の目的で築かれたものであるかについては、解明できず問題を今後にもちこした。

宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査報告（白石市、仙台市～大和町地区）」昭和47年3月



1. 横海縣西の石列



2. 出土古錢拓影 (1.2. 元豐通寶 3.4. 神聖元寶 5. 壽昌通宝 6.7.8. 皇宋通宝 9.10. 解說不能)  
9.10. 解說不能)



3. 想海塚全景  
(北側より写す)



4. 想海塚全景  
(南側より写す)



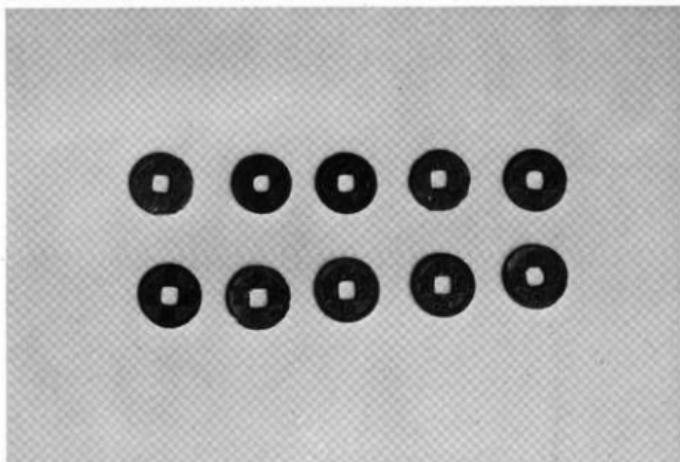
5. 想海塚全景  
(南東より写す)



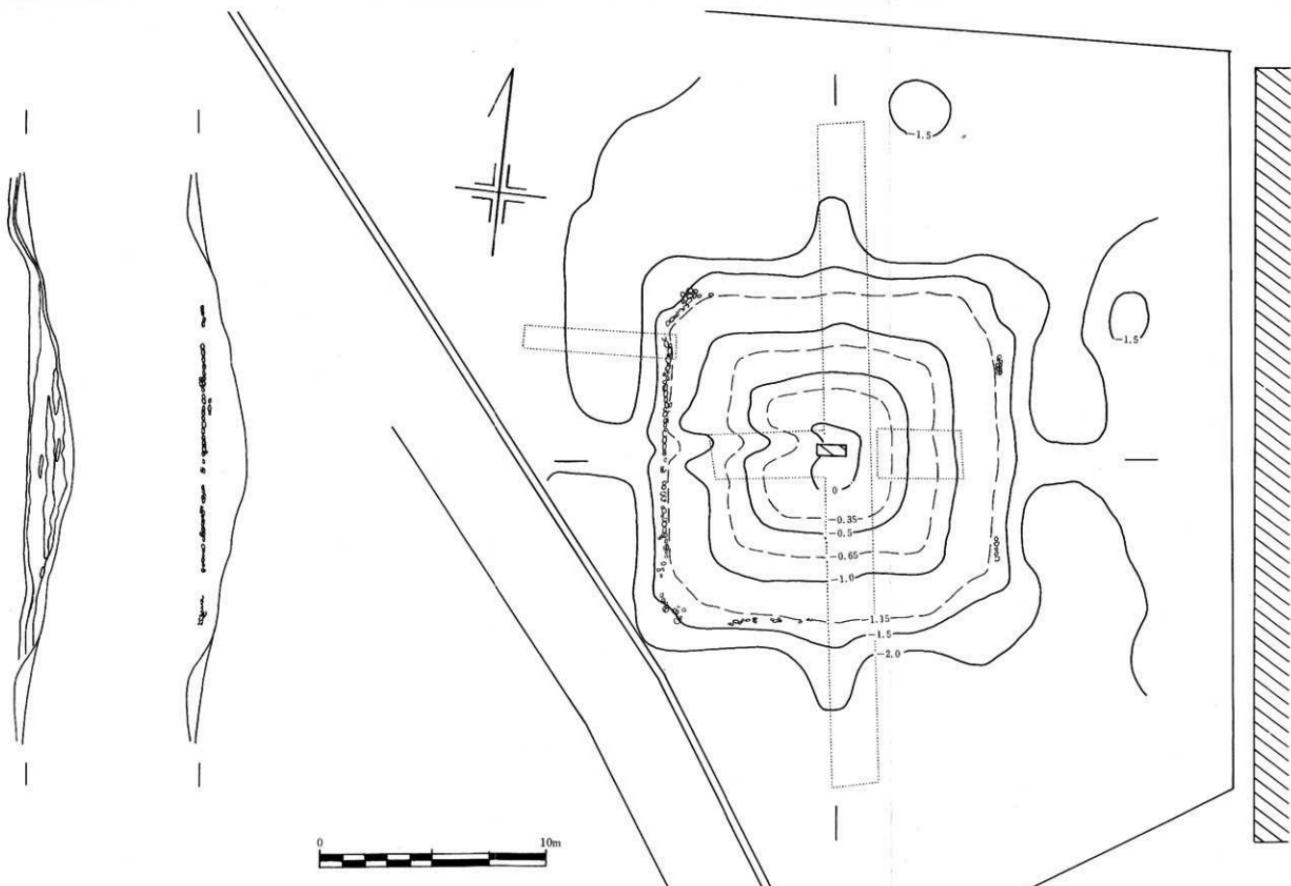
6. 西側の石列



7. 中央積土層  
(東面)



8. 出土古錢



想海図地形図および断面図

---

宮城町文化財調査報告書第1集  
**宮城町想海塚発掘報告**

昭和48年6月25日 印刷

昭和48年6月30日 発行

発行 宮城町  
宮城郡宮城町上愛子字蛇台原4-1

印刷 株式会社 東北プリント  
仙台市立町24-24 TEL 029 6466(代)

---